



近代語における 時 表示法の位相（浅見徹教授退任記念号）

著者	松井 利彦
著者別名	MATSUI Toshihiko
雑誌名	文林
巻	40
ページ	71-126
発行年	2006-03-20
URL	http://doi.org/10.14946/00001569



近代語における《時》表示法の位相

松 井 利 彦

(一)

近代語における《時》表示法の位相

《時》の新秩序を作り上げる出来事が明治五年にいくつかあった。そのなかでもっとも重要なことは、政府が時刻制度と時刻表記法を決定し、布告したことである。太陽暦の導入を決め、旧暦の明治五年十二月三日を、明治六年一月一日とすると定めると同時に、時刻制度に欧米風の二四ジ制を採用すると布告した（本稿では時刻制を、一二刻制・一二時制・二四ジ制と表示し、必要に応じて、二四ジ制の表記を、一二四時制、あるいは二四字制と記す）。当時の官報とも言える『太政官日誌』（第九七号、明治五年十一月九日付）に掲載された時刻に関する項目を、太陽暦に係わる事柄が第一項・第二項に記されているので、第三項、第四項と呼ぶならば、第三項と第四項には次のように書かれている。原文の一つ書きを第三項、第四項として掲げる（以後はこの布告を、二四ジ制の布告の第三項、第四項と略称することがある）。

1、三、時刻之儀是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分チ候処今後改テ時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻

迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト称シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト称候事

四、時鐘之儀来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処以後何時ト可称事

第三項は、従来、使用して来た、一日を一二に分割する不定時法（一二刻制や一二時制）を止めて、定時法の二四ジ制に改めること、そして、一日の前半を午前と言い、後半を午後と称して、「午前何ジ」「午後何ジ」という言い方を採用すると書いてあると理解できる。

一方、第四項（「時刻表」として掲げられている、二四時制と一二刻制の対照表は掲載を省略した。）の但し書きは、第三項で言ったことを文字で書く場合について触れたものであると解される。「何ジ」を従来、「何字」と書いてきたが、以後は「時」の文字を用いると記してあると読める。それぞれの条項をこのように理解すると、第三項と第四項とは矛盾する。第三項では二四ジ制を明治六年一月一日から導入すると書いてある。と言うことは、それまで二四ジ制は使用されていないと理解される。それにもかかわらず、第四項の但し書きでは二四ジ制は既に行われていると記してある。□で言うときには「何ジ」と言うので問題は無いが、書いたときに、「何時」と書くのと「何どき」と読まれる恐れがある。数字が四から九までの場合はその可能性がある。そこで、「何字」と書いて来たが、二四ジ制を導入すると、一二時制は使われなくなるはずであるから、時刻を表示する「時」は「どき」と読まれることがなくなる。したがって、明治六年一月一日からは時刻の表記に「時」の文字を使うことにする。このように書いてあると理解す

れば、二四ジ制は既に使用されていたことになる。

第三項と第四項とでは食い違う内容になっている。しかし、第三項は国として法令を以て二四ジ制を統一的に施行すると言っているものであり、しかし、現実には既に二四ジ制は使用されることがあって、その場合に「字」が使用されたと記してあると解釈すれば、第三項と第四項とは矛盾しないことになる。だが、この解釈が正当性を持ったためには、どのような人びとが、どのような所で、どのようなことについて、二四ジ制を使用したかを確認しなければならぬ。次に、既に二四ジ制が使用されていたとするならば、その場合、たとえば、「午前二字」のように「字」のみで書かれていたのかどうか。別の観点から言えば、二四ジ制の時刻表記に「時」が使用されることは全くなかったのか、明治六年一月一日から二四ジ制に「時」の文字の使用が始まったと解してよいのか、階層や、教養は関係しないのか、このような疑問が生じる。

また、もし「何時」を「何字」と書くのが普通であったのならば、たとえば、六〇分の二倍の時長は「二字間」と書いたであろうか。「二時間」と書くと、「フタトキノアイダ」と読まれる危険性があり、前者の「ニジカン」は六〇分の二倍の時の長さであり、後者の「フタトキノアイダ」は六〇分の四倍の時の長さであって、大変な違いになる。誤解を避けるのならば、「二時間」と書かず、「二字間」の表記を用いてよい。そうであれば、この明治五年の第九七号『太政官日誌』に記された時刻表示に係わる条項は、時の長さの表示にも関係することであったのか。このような疑問も出てくる。しかし、これらのことについては、この布告の文面からは理解しにくい。

この第三項と第四項が近代の時刻制と時刻表記法について教示してくれる事柄はきわめて重要である。しかし、当

時の時刻制・時刻表記法、そして時長表示法について正確な情報を伝えてくれないようである。とすれば、少なくとも次のことを別途に確認する必要がある。

- ① 二四ジ制は他の時刻制とどのような関係にあったか。
- ② 二四ジ制の使用はどのように広まっていったか。
- ③ 二四ジ制の時刻が使用される場合、「何ジ」の「ジ」の表記は、実際にはいかになされたか。
- ④ 二四ジ制の時長表示はいかに表記されたか。

このように問題を設定してみると、直ちに思い当たることがある。時刻に関する布告を出す明治五年以前に、政府は国民に対して二四ジ制を既に使用しているのである。「字」で二四ジ制を用いたことが三度あった。このことはよく知られている。

最初は明治五年五月三日のことであり、品川と横浜間の鉄道開通時の時刻表においてである。この時は仮営業であったから、上りは、横浜を「午前八字」発、品川に「午前八字三十五分」着と、横浜を「午後四字」発、品川に「午後四字三十五分」着の二本だけで、下りも、品川発午前九字と、午後五字発の二本であり、しかも直通であったから、二四ジ制の、そして、「字」を用いて書かれた時刻が直接、多くの人の目に触れたわけではない。しかし、五月九日には、神奈川ステーションと川崎ステーションが増え、本数も上下それぞれ午前に三本、午後に三本の、合計六本になったから、それだけ、「字」で書かれた二四ジ制の時刻を国民が見る機会が多くなった。そして、九月十二日に新橋・横浜間で、途中のステーションが品川・川崎・鶴見・神奈川になり、上り下り、それぞれ一日に九本が運転され

たから、それだけ、二四ジ制の、「字」を用いた時刻を見る人が多くな^増った。このことを考えれば、先ほど挙げた第四項の「但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処以後何時ト可称事」は、「唱え」や「称す」は「書く」あるいは「記す」の誤りであるから、これを訂正しなければならないが、事実であるということになる。しかし、一方で、数か月前のことだけを指して「唱来候」と書くであろうか、鉄道の時刻表以前に政府は国民に向かって二四ジ制を「字」で使うことがあったのではないか、という疑問が湧いてくる。この疑問は第三項と厳しく対立するが、第三項の基づく事実、第四項の依る事実、そして、両者の関係の究明は、近代時刻制の考察には避けて通れない必須事項である。

(二)

『太政官日誌』の創刊号は当時の時刻制・時刻表記の複雑な重層性を垣間見させてくれる。冒頭の記事は次のように書かれている(斜線は改行を示す。二四ジ制の時刻には実線を付す。一二刻制には点線を付ける。振り仮名は省略。)

2、二月十四日午ノ半刻ヨリ申ノ刻マデニ大坂西本願寺ニ於テ／醍醐大納言殿東久世前少将殿宇和嶋少将殿各国公使ト応接ノ始末左ノ如シ〈中略〉一亦曰今日必相分ルヘシト雖弥確定スルハ／明十五日ト定ムベシ／然ラバ明十五日十字ノ朝米国公使館ニ／於テ再会シ各般ノ諸事件ヲ約定セン／右之通ニテ相済申ノ刻各国公使退出セリ

(『太政官日誌』第一号。慶応四年二月刊)

この記事には一二刻制と二四ジ制とが使用されていて、後者に「字」が使用されているように思われる。思われる

といった曖昧な言い方をするのは理解しにくい所があるからである。「明十五日十字ノ朝」は江戸版^{キョウ}によって、京都版でも同じく「十字ノ朝」である。ただし、京都版では「明後十六日十字ノ朝」となっているのを江戸版で「明十五日十字ノ朝」に訂正している。しかし、「十字ノ朝」はそのままなのである。これは、「明十五日ノ朝」と「明十五日ノ十字」のコンタミネーションではないか、と思われる。おそらく「十字ノ朝」は「朝ノ十字」の誤りで、「午前十字」のことであろう。それが誤りのまま江戸版に継承されている。まだ、午前・午後という言い方が一般的でなく、二四ジ制に出版関係者が慣れていなかったために誤りが見落とされたのであろう。

このように修正することが許されるならば、『太政官日誌』の創刊号に二四ジ制が「字」で使用されていることになる。と言うことは、明治五年の『太政官日誌』九七号に記載されている時刻に関する布告は、一部が正しく、一部が誤りである、ということである。誤りである点は、明治六年を待たずに、政府は既に慶応四年において『太政官日誌』で二四ジ制を使用していること。正しいことは、二四ジ制を「字」で表記していることである。しかし、前者については、次のように言える。二四ジ制を慶応四年頃に政府は使用した。しかし、それは、事情があれば、使用することがあるという程度の使用であって、しばしば使ったのではない。そこで、明治六年一月から太陽暦を採用するのを機に国民に二四ジ制の採用を布告で周知させ、今後この制度のみを使用することにする。このように言っていると理解すれば、『太政官日誌』の明治五年の時刻に関する布告と、『太政官日誌』の創刊号に二四ジ制が「字」で使用されていることとは矛盾が和らぐ。ただし、『太政官日誌』の創刊号におけるただ一例の二四ジ制を以って、明治五年の『太政官日誌』九七号の時刻に関する布告の正誤・適否を云々することが適切であるかという問題は残る。それに、

事情があれば二四ジ制を政府が使うことがあると仮定してみたが、それはどのような事情か、ということの解明も必要である。要するに、第三項と第四項は文字通りに読めば、理解しがたいところがある。

そこで、慶応四年二月から、二四ジ制が実施される年の翌年（明治七年）までの間に時刻を記した記事が『太政官日誌』に掲載されているとすれば、そこで、いかなうな時刻制が使われ、時刻表記がなされているかを調べ、そこから当時の時刻制・時刻表記の実態を探ることにする。ただし、一八六八年は九月七日までを慶応四年とし、これより後、十二月三十一日までを明治一年として分割した（本稿では「元年」を「一年」と書く。）。

時刻を記した一まとまりの文書を一件と呼び（このことは後に例を挙げて説明する）、そのなかで、時刻制が一二刻制、一二時制、二四ジ制のいずれが使われているか、あるいは複数の時刻制が混用されているか、二四ジ制の場合には「字」と「時」のいずれが用いられているかを示したのが表1である。「払曉」「朝」「夕暮れ」「日暮れ」「日没」や「昼後」などは当時では時刻の表示であるが、ここでは時刻表示から除いた。また、昼過ぎの意の「午後」も時刻制から外した。「昼飯を済ませて」の意味を含む「正午過ぎ」の「午後」はよく使われる語であり、これを一二刻制による時の表示と認めると、一二刻制と他の時刻制との混用としなければならない文書が多くなるからである。また、「六時」だけが使用されている文書も対象から外した。「むつどき」か「ロクジ」か分からないからである。この種の時刻表記を除外しても、なおかつ、一二時制と二四ジ制との関係など、判別しにくい場合があり、削除せざるを得ない文書があった。したがって、件数や時刻制の認定にある程度の揺れが出る。これはやむを得ないことである。なお、以下の表では各年度の中心的な専用時刻制はゴシックにし、これを中心にパーセントを記した。

表 1

明治一年		慶応四年	
二〇〇件		一六一件	
一二刻制		一二刻制	
98件		77件	
一二刻制専用		一二刻制専用	
一二刻制・一二時制の混用		一二刻制・一二時制の混用	
一二刻制・二四字制の混用		一二刻制・二四字制の混用	
一二刻制・一二時制・二四字制の混用		一二刻制・一二時制・二四字制の混用	
1件	2件	13件	82件
			41.0%
二四ジ制		二四ジ制	
27件		27件	
二四制専用		二四制専用	
二四制・一二刻制の混用		二四制・一二刻制の混用	
二四制・一二時制の混用		二四制・一二時制の混用	
二四制・一二時制・二四字制の混用		二四制・一二時制・二四字制の混用	
2件	2件	23件	2件
			14.3%
一二時制		一二時制	
70件		70件	
一二時制専用		一二時制専用	
一二時制・一二刻制の混用		一二時制・一二刻制の混用	
一二時制・二四字制の混用		一二時制・二四字制の混用	
一二時制・二四字制・二四制の混用		一二時制・二四字制・二四制の混用	
59件	2件	9件	66件
			36.6%
一二刻制		一二刻制	
77件		77件	
一二刻制専用		一二刻制専用	
一二刻制・一二時制の混用		一二刻制・一二時制の混用	
一二刻制・二四字制の混用		一二刻制・二四字制の混用	
一二刻制・一二時制・二四字制の混用		一二刻制・一二時制・二四字制の混用	
66件	2件	9件	66件
			41.0%

[illegible]

[illegible]

明治六年				六八件				二四時制専用				3件			
一二時制				1件				一二時制・二四時制の混用				1件			
二四ジ制				68件				二四時制専用				66件			
								二四時制・一二時制の混用				1件			
								二四時制・二四字制の混用				1件			
明治七年				二八件											
二四ジ制				28件				二四時制専用				28件			
												100%			

第1表から次のことが読み取れる。

ア、明治七年は二四ジ制が厳守され、ジの表記に「時」が専用される。

イ、明治六年でもほぼ二四ジ制が実行され、ジは「時」の専用に近い。忠実に布告が守られていると言ってよい。

ウ、明治五年であるにもかかわらず既に二四ジ制のみで表示されている。しかし、ジは「字」で書かれることが多い。

エ、明治四年でも約七〇パーセントが二四ジ制で表示されている。ただし、「字」のみの表記である。一二時制の専用は約二四パーセントと少なく、その後、一二時制が使用されるのは一件のみである。また、一二刻制の専用は僅かに二件に過ぎない。それ以後の一二刻制の専用はない。

オ、明治三年では一二刻制の専用が約五八パーセントであり、残りを一二時制と二四ジ制が分け合っているが、二四

ジ制の専用の方が多い。

カ、明治二年では一二刻制の専用が約五〇パーセント、二四ジ制の専用が約三三パーセントであり、「時」の文字を使用したものも三例ある。もっとも少ないのが一二時制の専用で、約七パーセントである。明治二年以降、一二時制の使用は少ない。前年の明治一年と比べると、二四ジ制と一二時制の順位が入れ替わる。

キ、明治一年では、一二刻制の専用が四一パーセント、一二時制が約三〇パーセント、二四ジ制が約二〇パーセントであり、それぞれほぼ一〇パーセントの差がある。二四ジ制は「字」の表記のほかに「時」が一例ある。

ク、慶応四年では、一二刻制の専用が四一パーセント、一二時制の専用が約三七パーセントであって、大差はなく、

二四ジ制の専用は約一四パーセントに過ぎない。

このように見てくると、慶応四年から明治七年まで、一二刻制、一二時制、二四ジ制のいずれかが突出して多く使用されるのは、明治四年以後の二四ジ制のみである。新政府は王政復古の思想に基づいて政治体制を固めたから時刻表示も復古調の一二刻制が圧倒的に多く使用されてしかるべきであるのに、事實は、明治三年での五八パーセントが最高であり、明治二年での五〇パーセント、慶応四年と明治一年では四一パーセントに過ぎず、どの年度も五〇パーセント前後に止まっている。しかも、新体制発足の慶応四年と、その翌年は、明治三年や明治二年より専用率が低い。一二時制はどうかと言うと、慶応四年と明治一年での専用率が高いが、明治二年以後での専用は微々たるものである。二四ジ制は慶応四年以降、明治三年までの専用率は高くないが、使用が継続し、明治二年には一二時制を追い抜き、明治四年ではトップに躍り出る。

以上のことは、明治五年の『太政官日誌』第九七号で布告された第三項・第四項から理解されることがと隔たりがある。この布告に書かれている事柄をもう一度、確認すると次のようである。

第三項 時刻之儀是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分チ候処今後改テ時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時二分チ午前幾時ト称シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時二分チ午後幾時ト称候事

第四項 時鐘之儀来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事（右時刻」に該当する新旧時刻対照表は省略）

但是迄辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処以後何時ト可称事

第三項は、「是迄」は一日を一二分する不定時法であったのを、明治六年一月一日からは昼夜を二四等分にする二四ジ制を導入すると書いてある。第四項には、時刻を「何ジ」と書くときは、「是迄」使用して来た「字」を廃止して「時」を使用するとある。ところが、表1を見ると、明治五年以前に二四ジ制で書かれた記事が多くある。「何ジ」の「ジ」が僅かではあるが、「時」で表記されることがある。慶応四年から明治五年までの『太政官日誌』に見られる時刻制と表記法は、第三項と第四項から理解されるところと違ふところがある。しかも、時刻表示に統一性が弱く、雑然としている。これは、初期の『太政官日誌』の記事内容が反映していると考えられる。

『太政官日誌』の記事は、慶応四年からの数年間は新聞記事に近い。布告の他に、新政府の動向の報知、諸藩や有志の建白、諸藩からの届けなどを載せ、等質でない。書き手、記事の性格に違いがあり、さらに宛先が、太政官宛、下級官庁宛、国民宛などさまざまである。そこで、発信者を基準にして時刻制・時刻表記を整理し直してみる。

(三)

『太政官日誌』の記事を、政府の出す布告類と、藩や県が提出する届け書類に分け、時刻制と時刻表記との関係を見ると、表2のごとくである（各年度の、布告と届け書における中心的な時刻制はゴツチクにし、これを中心にパーセントを記した。）。

表2

慶応四年

布告

二三件 うち、一二刻制専用

20件

87.0%

一二刻制・二四字制の混用

1件

二四字制専用

2件

届け書

一三八件 うち、一二刻制専用

46件

一二時制専用

59件

二四字制専用

21件

一二刻制・一二時制の混用

9件

一二刻制・二四字制の混用

1件

一二時制・二四字制の混用

2件

6.5% 15.2% 42.8% 33.3%

明治一年

布告

一九件　うち、一二刻制専用

一二時制専用

1
件

89.5%

屈指書

一八一件 うち、一二刻制専用

二二刻制・一二時制の混用

65
件

36.1%

一二時制専用

59
件

32.8%

二四字制専用

41
件

22.89

二四時制専用

1
件

二二刻制・二二時制の混用

12
件

一二刻制・二四字制の混用

2
件

一二刻制・一二時制・二四字制の混用

1
件

一二時制・二四字制の混用

1
件

明治二年

布告

六二件　うち、一二刻制専用

一四字制専用

9
件

二四字制・二四時制を混用

1
件

52
件

14.5% 83.9%

明治三年		明治四年	
届け書	六一件	届け書	三八件
うち、	うち、	うち、	うち、
一二刻制専用	一二刻制専用	一二刻制専用	一二刻制専用
一二時制専用	一二時制専用	一二時制専用	一二時制専用
二四字制専用	二四字制専用	二四字制専用	二四字制専用
二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用
二四字制・二四時制の混用	二四字制・二四時制の混用	二四字制・二四時制の混用	二四字制・二四時制の混用
一二刻制・一二時制・二四字時制の混用	一二刻制・一二時制・二四字時制の混用	一二刻制・一二時制の混用	一二刻制・一二時制の混用
2件	26件	1件	2件
6件	5件	1件	3件
3件	10件	3件	2件
32件	54.2%	20.8%	52.5%
9件			
9件			

明治五年			明治六年			明治七年		
届け書	届け書	届け書	届け書	届け書	届け書	届け書	届け書	届け書
三九件	三七件	三九件	四七件	四七件	四七件	二五件	二五件	三件
うち、二四字制専用	うち、二四字制専用	うち、二四字制専用	うち、二四時制専用	うち、二四時制専用	うち、二四時制専用	うち、二四時制専用	うち、二四時制専用	うち、二四時制専用
二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用
一二刻制・一二時制の混用	一二刻制・一二時制の混用	一二刻制・一二時制の混用	二四時制・二四字制の混用	二四時制・二四字制の混用	二四時制・二四字制の混用	二四時制・一二時制の混用	二四時制・一二時制の混用	二四時制・一二時制の混用
一二時制専用	一二時制専用	一二時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用
二四字制専用	二四字制専用	二四字制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用	二四時制専用
36件	36件	36件	46件	46件	46件	20件	25件	3件
92.3%	92.3%	92.3%	97.8%	97.8%	97.8%	95.2%	100%	
68.4%	68.4%	68.4%	23.7%	23.7%	23.7%			

表2から判明することは次のことである。

ア、政府と、各藩・県とでは、使用する時刻制が必ずしも同じではない。

イ、概して言えば、政府の時刻制は統一的であり、各藩の時刻制は多様である。

ウ、政府の使用する時刻制は、慶応四年・明治一年では一二刻制の専用に近い。明治二年でも、約八四パーセントが一二刻制の専用であり、明治三年になると率は下がるが、半数を維持している。二四ジ制の専用は、慶応四年で約九パーセント、明治一年でゼロ、明治二年で約一五パーセント、明治三年で約二一パーセントで少しずつ増えはするが、僅かである。しかし、一二時制よりは多い。一二時制の専用は微々たるものである。政府の出す文書は慶応四年から明治三年までは一二刻制が主流である。政治体制の王政復古と呼応する時刻制が採用されていると言ってよい。ところが、明治四年になると、一二刻制はほとんど使われなくなり、二四ジ制の専用が約六八パーセント、一二時制の専用が約二四パーセントになる。時刻制が大きく転換する。そして、明治五年になると、二四ジ制の専用手率が一〇〇パーセントに近くなる。『太政官日誌』での二四ジ制導入の予告は、この事実が強く関係しているのであろう。鉄道開通における時刻表の二四ジ制もこの流れのなかに位置づけるのが適切なのであろう。

エ、届け書は、明治三年から五年までではないか、極めて少ないので除外して、慶応四年を見ると、もっとも専用手率が高いのは一二時制で約四三パーセントである。次が約三三パーセントの一二刻制である。布告と比べると一二時制の多いのが目立つ。明治一年では一二刻制と一二時制とは専用手率がほぼ同じであり、ここでも布告に比

べると一二時制が善戦している。二四ジ制は慶応四年では約一五パーセントと少ないが、明治一年になると、一二刻制・一二時制の専用率に近づいて約二三パーセントになり、増加率が高い。そして、明治二年には二四ジ制の専用率が約五二パーセントになる。二四ジ制の専用率が五〇パーセントを超えるのは届け書のほうが布告より早い。諸藩・県、侍など、非政府的な立場にある機関・人びとを民間と呼ぶことが許されるのならば、二四ジ制の使用は、民間が先行していたのである。政府の二四ジ制導入の決定には民間での二四ジ制の広がり
が影響しており、明治五年の二四ジ制導入の布告は、予告ではなく、追認と言ってよい一面があった。明治五年の時刻に関する布告の第三項と第四項に矛盾があるのはこのような背景があったからであろう。

以上は数字の上での概観であったので、次に、布告と届け書に分け、文書に即してそれぞれの特徴的な時刻制・時刻表記を見ることが出来る。

〔四〕

布告では、慶応四年は一二刻制が中心であるが、二四ジ制との混用が一件あり、また二四ジ制の専用が二件ある。前者については既に示したので、二四ジ制の専用を次に出す。一つは「兵学校規則」における使用である（時長表示に二重線を付す。二四ジ制に実線、一二刻制に点線を付けることは従前どおりである。）。

3、一、稽古之生徒毎朝七字三十分時揃之事

一、八字ヨリ十字迄練兵十字ヨリ二十分時ノ間休息十字二十分時ヨリ十二字迄兵学

(慶応四年『太政官日誌』第五二号)

他の一件は第三八号に掲載されている「中下大夫及び上士へ御達書写」においてである。「今般御暇被_レ下置_二候ニ付テハ」で始まる役人の休暇についての記事であるが、四行目で面(ページ)が変わり、「昨二十七日三字頃ヨリ北ノ方十八町位御座候会津街道筋大谷地村ヲ根拠トシテ」という戦況報告になる。届け者は「薩摩少将内 新納嘉藤」である。したがって、この部分は乱丁のために「布告」に二四ジ制が使用されているかに見える状態になっていると考えてよい。この箇所は京都版にはない。この二四ジ制は届け書での使用と処理すべきである。

そうになると、慶応四年での二四ジ制専用の文書は「兵学校規則」だけである。このような兵学校の制度は欧米の影響下に成っており、それ故に分単位の時刻が示されているのであるが、この細かな時刻の表示に耐えられるのは二四ジ制のみであるから、この時刻制が使われた理由は明白である。

明治一年では二四ジ制の使用はゼロである。一二時制は次のように使用されている(一二時制の時刻には破線を付ける)。

4、来十八日 新嘗祭於_二神祇官代_一被_レ為_二執行_一候ニ付十七日暮六ツ時ヨリ十九日朝五ツ時迄仏事類鐘等停止被_二仰付_一候事(明治一年『太政官日誌』第一四〇号)

これは民間に対する布告なので多くの人に馴染みのある時刻制が使用されたと考えられる。一二刻制と一二時制の

混用の一例は次の「皇学所開講」についてのお触れである。

5、来十四日 皇学所御開講被_レ仰出_二候間宮堂上及非藏人諸官人_ニ到迄入学勉励可_レ致候〈中略〉

一 御開講当日卯半刻参集可_レ有_レ之事／一 衣体之儀堂上狩衣直垂地下麻上下之事／ 規則 一 入学之儀
毎月四之日ニ被_レ定候〈中略〉／一 講釈 自_二四時_一至_二九時_一〈以下省略〉／一 素読 毎朝自_二六半時_一至_二八時_一／一 輪講 同 自_二八時_一至_二七時_一〈中略〉 右二点ハ於_二局中_一為_レ之自_二七時_一至_二晩時_一 (明治一年『太政官

日誌』第一六七号)

最初の箇条に一二刻制が使用され、三つ目以後の箇条に一二時制が使われている。両者は一つ書きの箇条の中での使用であることでは同じである。しかし、内容が違う。前者は皇学所開講に就いての説明文であり、後者は規則文である。一二刻制と一二時制は「規則」という語で分けられている。前者は敬体の文章、後者は主として非敬体の文章である。この差が時刻制に対応している。

明治一年では、先に示した、一二時制、一二刻制と一二時制の混用の二例以外の一七件はすべて一二刻制で書かれている。行幸・行啓についても、宮中の祭典についても、また諸藩への沙汰書においてもそうである。明治と改元された一八六八年の布告は伝統的な時刻表示である。

明治二年では、一二刻制の専用に近いが、二四ジ制が、御沙汰書・御達書に七件、民部省火事に一件、民部省規則に一件、使われている。「民部省規則」では資料3・資料5と同様の規則書である。

6、第十字参仕第十二字迄前日調べ置ノ事務ヲ決断シ第十二字ヨリ第二字退出ニ至ル迄当日ノ事務ヲ取調べ置ベシ

(明治二年『太政官日誌』第八四号)

御沙汰書・御達書には「十字参朝二字退出之事」(「議行両官規則」、八号所収)や、「昌平学校講義」の規則(四四号所収)、「甲日本主弁事へ出ス事件乙日十二字後弁事参与へ議ス丙日十二字迄ニ議事ニ決シ十二字後輔相弁事ニ付ス」(八号所収)のごとき規則類での二四ジ制の使用が多い。時刻の順序が分かりやすいからであろう。

二四字制と二四時制の混用は次のものである。

7、英国王子参内略記追録

七月二十二日王子横浜へ着艦寺島外務大輔艦ニ就テ之ヲ勞ス二十四日第八字英国甲鑲船「オーシン」ニ於テ祝砲二十一発へ中略第十一字王子上陸公使館へ着ス七月二十五日へ中略第十字王子延遼館ニ至ルへ中略七月二十八日第一時王子参内へ中略八月三日第十字王子川蒸氣船ニ駕シテ品川沖ニ至リへ中略八月十一日三字半王子乗艦横浜ヲ発ス(第一〇〇号)

二四ジ制の時刻表記に、「字」に混じって「時」が一例、使われていることは注目に価する。これは層別と時刻制・時刻表記との当時の特殊な関係を示すものである。このことは後に詳説する。

このように明治二年になると布告にも二四ジ制が使用されるが、より多くは一二刻制が使われる。二四ジ制の一〇件に対して五二件である。この五二件の内容は次のごとくである。東京奠都に伴う行幸、天皇の地方巡視(東巡・行幸報告)などに関する記事が二七件で半数を超す。また、天皇の会議出席、孝明天皇の祭典、新嘗祭や神殿の移転な

ど天皇や皇居における行事についての記事である。一二刻制と二四ジ制とは内容によって使い分けられている。

明治三年でも、一二刻制は行幸や祭典の記事に使用されるのがほとんどで、他はわずかに駅逓改正表・郵便規則が一二刻制で書かれる程度である。一二時制は、「暮六ツ時ヨリ切迄ハ」「夜五ツ時切ニ就イテハ切後無提灯通行一切禁止之事」のような外桜田門など十門の通行や、「夜五ツ時後無提灯ニテ通行ノ者ハ取糺シ」のごとき三府ならびに開港場での通行、また、「並々之出船ハ曉六ツ時ヨリ夕七ツ時迄ニ可限事」のような渡船場の運航など、庶民に關係の深い事柄にのみ使用されている。

二四ジ制の使用された文書に、ベルギー・イタリアの公使参朝や、フランスとプロシヤの戦争に対して日本は局外中立であることを記した記事がそれぞれ二件ある。外国との關係によるものである。練兵天覽の二件の記事に二四ジ制が使用されているのは軍隊と二四ジ制の特別の關係を示すものであろう。このほか、祭典に二件、皇居の火事に一件、官員免職時の出頭時刻について一件、二四ジ制が使われる。二四ジ制で書かれる内容に広がりが出てきている。

明治四年では、一二刻制は、僅かに元旦の四方拝等の行事や、神事に関する記事中での使用である。一二時制は大井川や天竜川などの渡船運賃に関する記事での使用が主で、庶民に關係の深い記事での使用である。二四ジ制は、フランス・オランダ・アメリカの公使や、オーストリア貴族の参内の記事のほか、神武天皇・孝明天の祭典、天皇の浜殿・延遠館への臨御、横須賀への行幸、賢所での神樂の記事、後に触れる「特命全權大使欧米各国へ發遣」の式についての使用、そして、「旧本丸ニ於テ来ル九日ヨリ昼十二字大砲一発ツ、毎日時号砲執行候条為心得相達候事」(第六三号。ドンの開始について)など、さまざまな内容に使われている。慶応四から明治三年までに見られた、天皇や宮

中の儀式関係には一二刻制という使用限定は明治四年には破綻し、一二刻制・一二時制・二四ジ制の層別は消滅している。

明治五年では、ほとんどの記事が行幸と宮中行事についてであるが、二四ジ制で書かれている。鉄道開業式への天皇出席は勿論のこと、庶民と関係の深い身代限りの揭示見本でも、「入札致度相望者ハ当日何字同人方ヘ可罷出者也」とある。なお、二四ジ制の「時」による三例は、十一月二十三日付の第一〇二号以後における使用で、「元始祭式」についても「午前第八時神官ノ長幄舎ニ着ク」とある。十一月九日の第九七号で「来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事」と書きながら、早くも「時」を使用している。それほどまでに二四ジ制の「時」の使用が望ましかったのである。「時」は便利・正当であり、逆に「字」は便宜的、臨時的であると考えられていたからであろう。

明治六年になると、一例を除いて二四ジ制である。布告の内容や宛先に制限はない。例外は福岡県からの報告である。

8、右五名ノ者本月八日午前第十時過当管内筑紫国宗像郡瀛津島近ク漂流〈中略〉其事歴ヲ筆問スルニ〈中略〉釣魚ノ為メ出船慶州甘浦ニ夜ヲ徹シ候処翌十三日朝四ツ時頃ニ至リ卒然颶風ニ遇ヒ」（第一五八号）

これは朝鮮慶州の漂流漁師の話を翻訳したために、民間の通常の時刻の言い方として一二時制が使われているのだと考えられる。

かくして、明治六年の布告では「時」を用いた二四ジ制の使用が普通になった。政府の出す布令中の時刻の表示は、次節で見る届け書ほどには、一二刻制・一二時制・二四字制・二四時制の間で揺れがない。維新政府にとって一二刻

制がふさわしい時刻制であり、それに、書き手が固定しており、また、書記の訓練を受けた人であったからであろう。しかし、それは明治三年までである。政府は、慶応四年から二四ジ制を使うことがあり、明治四年からは二四ジ制を完全実施している。そして、「時」の文字を明治六年一月を待たずに数ヶ月前から使用する。二四時制の怒濤に耐えられなかったのである。

〔五〕

届け書では、慶応四年において三種類の時刻制が使われている。それが、布告の時刻制との一大相違点である。しかも、当時の公的時刻制である一二刻制が全体の三三パーセントであり、民間常用の一二時制が全体の約四三パーセントであって、後者の使用のほうが多い。届け書の時刻制には、非公的・日常的である傾向が見える。ところが、このこととは別の現象が認められる。二四ジ制が約一五パーセント（二二件）、使われている。二四ジ制は布告では、「兵学校規則」に専用が一件、それと、一二刻制との混用が一件あったに過ぎない。ところが、各藩からの届け書には早くも欧米の時刻秩序が活用されている。このことは年を追って顕著になる。しかも、「時」の文字を用いた二四ジ制さえ、明治一年に一件、明治二年には三件で使用されている。政府の時刻制に比べて、民間の時刻制は概して欧米的であり、その点で近代的である。

なぜ各藩のほうが二四ジ制の使用が多いか。それは、慶応四年・明治一年、そして明治二年の各藩の届け書のほと

などが、戊辰戦争の戦況報告だからである。この頃の戦争は洋式である。^{注4}

届け書の時刻制は全体的に見れば以上のごとくであるが、藩ごとに見ると、藩により、また書き手によってまちまちである。このことと関係があるので、届け書の数を「通」と言わず、「件」と言ってきた理由をここで説明しておく。明治一年の『太政官日誌』一四五号に掲載されている「大村藩届書写」を例に取ると、この届書の構成は次のとおりである。

9、①八ツ時頃賊兵俄ニ繰引山手ニ集リ〈中略〉翌二十二日〈中略〉七ツ半時頃横沢村手前ニテ砲戦〈中略〉翌二十

五日角館へ引揚申候以上／九月朔日 大村藩 十九貞衛

②未ノ中刻頃弊藩持場下川原村辺へ侵来〈中略〉翌二十九日〈中略〉未ノ中刻頃悉ク退散仕候右両日ノ戦争賊兵

死傷夥敷御座候以上／九月四日 大村藩 十九貞衛

③本月十五日曉天〈中略〉翌十六日猶奮戦ノ央〈中略〉夕七ツ時頃小杉山へ引揚申候右両日之戦争賊兵戦溺死亡

夥鋪生捕数多悉ク斬首弊藩死傷追テ取調可ニ申上ニ候以上／九月 大村藩 大村右衛門

④右ノ通於ニ出先ニ御届申上候〈中略〉弊藩兵隊当月十一日東京着仕候趣申越候此段御届申上候以上／十一月

大村丹後守公用人 一瀬左衛門

右の届書は『太政官日誌』に一通の文書として掲載されている。④の一瀬左衛門が、奥羽での戦況報告を出張の藩兵から受けて、それを太政官へ報告したものである。したがって、届け書としては一通である。しかし、この届け書は、三人の書いた四種類の報告書から成っている。ただし、時刻制が書かれているのは三種類であるので、本稿では

これを三件と数えた。①②は同一人が書いた一二時制と一二刻制の文書。③は①②の書き手と別人が一二時制で書いた文書である。これらを纏めて一通の文書として扱うと、当時の時刻制の複雑な実態が埋没してしまい、一文書中の複数時刻制と区別がつかなくなる。そこで、①②③を別の文書として扱うことにし、『太政官日誌』で記されている「通」とは別に、「件」を用いた。「件」は時刻表示の用例数ではなく、書記者ごとの文書数を示す。

諸藩の、報告者と時刻制・時刻表記との関係は次のごとくである。『太政官日誌』に一〇件以上を報告している藩を対象にし、一二刻制を多く使用する藩、一二時制を多数用いる藩、二四ジ制を使うことの多い藩の順にほぼ並べた。秋田藩からの届書は一八件。全部が一二刻制で表示されている。村瀬清届で六件、他は無署名であり、すべてが明治一年での使用である。

久保田新田藩からの届書は一四件。一二刻制が八件、一二時制が四件、一二刻制と一二時制の混用が二件であり、二四時制の使用はない。村瀬清届に一二刻制が三件、一二時制が一件。大田原租助届に一二刻制と一二時制の混用が二件、一二時制が一件で、他は無署名である。一二刻制に傾いている。すべてが明治一年の届である。

彦根藩からの届書は一一件。一二刻制が六件、一二刻制と一二時制の混用が二件、一二時制が二件、二四ジ制が一件。そのうち、河手主水届に一二刻制が一件、一二刻制と一二時制の混用が一件、一二時制が一件、二四ジ制が一件で、他はほとんどが無署名である。藩内では一二刻制が優勢であるが、川手主水はさまざまな書き方をする。慶応四年では一二刻制が四件、一二刻制と一二時制の混用が二件、一二時制が一件あり、明治一年では一二刻制が二件、一二時制が一件、二四ジ制が一件である。

加賀藩からの届け書は一〇件である。そのうち一二刻制が六件、一二時制が二件、二四ジ制が二件である。届け人別に見ると、赤座甚七郎届に一二刻制が二件、二四ジ制が一件で、富永佐太郎・土師湊の連名の届に一二刻制が一件、二四ジ制が一件、小谷兵左衛門届に一二時制が二件で、他は無署名である。一二刻制が優勢である。慶応四年は一二刻制が三件、一二時制が二件で、明治一年では一二刻制が三件、二四ジ制が二件である。明治に入って二四ジ制の使用されていることが注目される。

富山藩の届け書は一件で、一二刻制が六件、一二時制が五件で、一二刻制と一二時制が張り合っている。村井外守届に一二刻制が三件、一二時制が三件。浅尾嘉左衛門届に一二刻制が三件ある。他は無署名。すべて慶応四年での使用である。村井と浅尾とでは時刻の表示法が違ふ。

肥前藩は一件のうち、一二時制が九件、一二刻制と一二時制の混用が一件、二四ジ制が一件で、一二時制が優勢である。原口重蔵届に一二時制が四件、一二刻制・一二時制の混用が一件、二四ジ制が一件、高木権太郎届では三件とも一二時制。他は無署名。これらはすべて明治一年における使用。

高田藩からの届け書は一七件。うち、一二時制が八件、一二刻制が五件、一二刻制と一二時制の混用が三件、一二刻制と二四ジ制の混用が一件である。一二時制に傾いている。届別では、柴田定衛門届に一二刻制が四件、一二刻制と一二時制の混用が二件、丹羽六大夫届に一二時制が三件、一二刻制と一二時制の混用が一件で、他は無署名である。すべて慶応四年の届であるから、書き手によって一二刻制が主か、一二時制に傾くかに分かれ、藩としては時刻の表示がさまざまであるということになる。

岩国藩の届は一件で、一二刻制が四件、二四ジ制が四件、一二時制が三件である。三通りの表記法が鼎立している。届別に見ると、有福新輔届で二四ジ制が三件、今田鉄左衛門届で一二刻制が二件、玉乃東平届で一二時制が二件、勝屋九一郎届で一二時制が一件、二四ジ制が一件、桂郁太郎届で一二刻制が一件、桂・栗原連名届で一二刻制が一件である。これらはすべて明治一年における届であるから、人によって偏りがあり、藩全体としては時刻表示が一定していないことになる。

薩摩藩からの届は一件で、一二時制が五件、二四ジ制が五件で、両者が拮抗している。このうち、新納嘉藤二届で一二時制が三件、二四ジ制が一件、内田仲之助届では二四ジ制が二件。他は無署名の届である。一二刻制の使用はない。明治一年における三例の二四ジ制以外はすべて慶応四年の使用である。明治一年での二四ジ制の出現率が高い。

大垣藩の届は、一二件のうち、二四ジ制が七件、一二時制が三件、一二刻制が二件で、二四ジ制が優勢である。二四ジ制の使用は、戸田三弥届で四件、壮合渚之介届で三件である。一二刻制は壮合渚之介届と柴崎秀左衛門届でそれぞれ一件ずつ、また一二時制は三宅鋏太郎と、有竹・壮合、壮合・柴崎の連名報告書で使われている。なお、二四ジ制の使用は慶応四年で五件、明治一年で二件であり、一八六八年の後半より前半の使用のほうが多いのであるが、明治一年での時刻表示は二四ジ制の二例のみであるから、慶応四年のほうに二四ジ制の使用が多いと単純には言えない。

佐土原藩では一〇件のすべてが二四ジ制で書かれている。特定の人を書いたのではない。富田三蔵届、能勢二郎左衛門届、井上仲太夫届であったり、無署名の届であったりである。慶応四年が一件、明治一年が九件で、ほとんどが明治一年の届であることが二四ジ制の使用数に反映しているのであろう。

最後に、特別に安芸藩の場合を見てみる。

安芸藩は八件のうち、二四ジ制が四件、一二時制が二件、一二時制と二四ジ制の混用が一件、二四制・二四時制の混用が一件である。届別では、寺西盛登届に一二時制が一件（明治一年）、一二時制と二四ジ制の混用が一件（慶応四年）、二四ジ制が一件（慶応四年）あり、慶応四年に二四ジ制の使用があるのが目立つが、明治一年の二川主税届と野村帯刀届にも二四ジ制がそれぞれ一件ずつある。二四制と二四時制を使用するのは増田雄之進で、「夕三字頃ヨリ砲声頻ニ起リ四時前ニ小荒井村辺大戦」のように使う。ただし、これは明治二年でのことである。

藩ごとに、また書き手によって時刻表示が違ふ。傾向があるとすれば、慶応四年と明治一年とで、一二刻制の減少と、二四ジ制の出現率の増加が認められることであろう。

民間層の時刻制・時刻表記で、もっとも特異なのは軍艦からの報告である。ここでは二四ジ制が使用され、「時」の文字の使用が多い。五分や一〇分の倍数以外の、八分や三八分といった分単位の時刻が記されることがあるのも、藩からの届け書と異なるところである。

明治二年六月三十日付『太政官日誌』（八〇号）に記載の「陽春艦届書写」に次のように時刻が記されている。

10、三月十六日各艦浦賀港出帆〈中略〉四月六日各艦発港〈中略〉同十六日午後一時発港〈中略〉同十七日午前四時

半ヨリ陸兵応援ノ為メ発港

この後の時刻のみを日付を記さずに示すと、「午前九字ヨリ十二字・午後四字半頃・五字頃・十字半過・午前七字過・午後四字・午前八字・午十二字・午後二字半・六字・午前五字半・十一字半・午後四字・午前七字半・午十二字

過・午前三字・午前二字過」〈以下省略〉である。「午前」と「午後」を使用して二四ジ制が克明に記している。「午後一時」のような「時」の表記も見られる。報告者は陽春艦船將の石井貞之丞である。次に、同号に掲載されている「丁卯艦届書写」の時刻制を見る。

11、四月九日朝八字三十分甲鍊春日陽春一同蝦夷地乙部村冲着陸兵繰揚十二字ヨリ陸軍進撃応援ノタメ江差諸台場へ砲撃仕候処賊ヨリモ当艦へ向ケ銃丸数発三時三十分砲発ヲ止メ六字頃江差落去仕候同月十七日朝十字三十分ヨリこれ以後の時刻の表示だけを日付を略して挙げると、「午後四字四十五分・朝七字・午後四字三十分・同字五十五分・夜二字過・早天四字三十分・正午前・朝七字五十分・十字過・十一字前・朝八字四十分・同字五十分・十字二十五分・六字十分・同時四十五分・夜三字十分・午後一字二十分」である。この届にも一度だけであるが、ジが「三時三十分」と「時」で記されている。この報告書には陽春艦のように「頃」、「過(ぎ)」といった表現が少ない代わりに「十分・二十分・二十五分・三十分・四十分・五十分・五十五分」など、時の刻みが細かい。報告者は山県久太郎である。二人が使用する時刻制には、明治五年の『太政官日誌』(九七号)に記載された「子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時二分チ午前幾時ト称シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時二分チ午後幾時ト称候事」が、明治二年に既に、口頭語では勿論のことであろうが、文書語において行われていたことが現れている。これらの報告書の「字」を「時」に改めるならば、明治六年以後とまったく変わらない。

丁卯艦と陽春艦からの報告書では「時」の文字の使用は一例ずつであるが、軍艦関係では二四ジ制が「時」で表記されることが少なくない。明治二年四月の『太政官日誌』(四〇号)に記載の「南部彦太郎届書」に次のようにある。

12、去月二十五日曉同所沖合ヨリ外国之旗章ヲ揚賊艦一艘□来忽日之丸ノ旗章ヲ揚替砲門相開候ニ付碇泊之御軍艦速

ニ御繰出ニ相成同所海岸統羅賀浦之沖合ニテ朝四時ヨリ七時迄嚴敷被及砲戦候内〈以下省略〉

報告者は「南部彦太郎内 瀬山守司」である。この「四時」はヨジであろう。その後に「七時」が続くからである。

また、次のことも参考になる。攻撃された「甲鉄艦」からの報告が『太政官日誌』の四三号に出ている。「去二十五朝五字頃アメリカノ国旗ヲ揚候船忽然我甲鉄艦ヲ目懸乗来候処計ラスモ廻天丸ニテ賊ナルコト判然ニ付（中略）此戦三字ノ間ナリ直ニ追撃之手合セイタシ各艦八字ゴロヨリ発港追掛ケ候テ」とある。前者と後者では一時間のずれがあるが、三時間（「三字ノ間」）の戦闘であったことなど符合するところが多い。したがって、南部藩からの報告書の「四時ヨリ七時迄」は「四ジより七ジ迄」であることは間違いない。ただし、これは軍艦からの報告ではなく軍艦についての報告書である。

軍艦からの報告書である「軍艦参謀届書写第一」（明治二年『太政官日誌』五四号）の中ではジが「時」で書かれることが多い。この届には四件の報告が記載されている。最初の報告書は春日艦からの報告書で時刻のみを取り出して示すならば、「昼十二時・一字・二字・同時五十分・五字・六時三十分」であり、「時」と「字」は三対三である（ただし、分単位の時刻が後に来るときは「時」の文字が使用されることが多い。他の文書にも同じ傾向が見られる。「とき」と読まれる気遣いがないためであろう）。二番目も春日艦からのもので、「七字・三字三十分」であり、二例とも「字」である。三番目は、「朝第七時茂辺地沖ニ到リ候処〈中略〉午後四時三十五分砲撃ヲ止メ同時五十五分出港泉沢へ帰港仕候此段御届申上候以上」で、三例とも「時」である。報告者は丁卯艦の山県久太郎である。山県につ

いては先ほど紹介した。その時、山県は「時」を一例しか使わず、他は「字」を使用していた。山県は二万流である。四件目は、「四月二十八日午後七時参謀曾我準造甲鉄艦参謀増田虎之助軍監今井亮介春日艦乗組二十九日曉天二時三十分諸艦泉沢村沖揚錨四時当別村沖ニ来着五時朝陽陽春両艦茂辺地村へ向ケ発砲」で始まり、後は時刻のみを記すと、「同時二十分比・六時・八時・同時三十分・十時十五分・同時三十分・十一時・十二時・三字・曉天五字」である。報告者は「軍艦乗込／参謀／軍監」とあって、人名はない。この文書では最後の三例の時刻表記に「字」が使用されるだけで、後はすべて「時」である。このような届け書もある。諸藩からの届では、一二刻制や一二時制の中に、二四ジ制が混用されることがあっても、二四ジ制は一例か二例に過ぎず、ましてジが「時」で書かれることは極わずかである。ところが、軍艦に係わる届け書では二四ジ制であり、右のように「時」の専用に近い報告書さえある。ただし、すべてがそうであるとは限らない。「軍艦参謀届書 第二」（明治二年『太政官日誌』五五号）の二件の届け書のうち、一番目は二四ジ制が四回、二番目は二四ジ制が七回、記されているが、すべてが「字」による表記である。これら海軍関係の届け書では、一二刻制や一二時制の使用されることがない。もっぱら二四ジ制である。ただし「字」が使用される場合と、「時」の使用される場合の、両方がある。山県久太郎のごときである。

以上で、慶応四年から数年間の『太政官日誌』に見える時刻制が、政府の出す文書と、各藩の侍が書く文書とでは同じであるに限らないことを示した。また、政府の文書の時刻制が明治四年を境に変化したこと、さらに、侍の文書の時刻制と時刻表記は多様であり、特に海軍に係わる文書では、報告者が、陸上での戦闘者と同じ身分の侍であるにもかかわらず、使用する時刻制・時刻表記に大差があることも指摘した。ただし、これらは、官報での、また、特殊

な環境における侍の時刻表示である。それ以外の民間で用いられる時刻制・時刻表記はどうであったか。

(六)

明治四年に刊行中の『西洋道中膝栗毛』で二四ジ制の「字」が使われていることは鈴木英夫氏によって既に指摘されている。^{註5}このほか活字メディアでは次のような使用例を示すことができる。

13、五月十八日ノ大風ニ兵庫神戸辺荒破ニ及ビシ報信ニ本日十二字後ヨリ吹起リ同夜九十字頃最暴激十二字ニ至リ海水俄ニ溢レ（『新聞雑誌』三号、明治四年刊。振り仮名は省略した。）

14、榎本安兵ヱと云者去る十二日夜十一字頃一ツ橋御門内に於て暗殺に及（中略）翌十三日七字ころ絶息せり（『東京日日新聞』二十九号、明治五年三月二十日刊）

15、本月二十六日夜十二字頃常州水戸旧城中東の方より出火（中略）同曉七字過ぎ漸鎮消したり（『郵便報知新聞』第一〇号、明治五年七月。振り仮名は省略。）

二四ジ制の導入が布告される前、特にその年の明治五年では、マスコミでは既に二四ジ制を採用し、そして「字」を使用することが多かった。侍の、ただし、戦闘下でない、個人的に用いる時刻制・時刻表記でも、これに近い。

『西洋道中膝栗毛』が刊行されていた明治四年は、岩倉具視を特命全權大使として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文たちがアメリカ、そしてヨーロッパ各国へ視察に出発した年である。同行の久米邦武は時刻を『特命全權大使』

米欧回覧実記』で次のように書いている。

16、①夕五時ニ瀛車ニ上リテ、六時ニ再ヒ勞徳^{ロート}ノ宅ニ帰り、(『米欧回覧実記 第三十卷 (二)』一九八ページ、平成五年・一九九三年第一刷刊。)

②夕五時ニ瀛車ニ上リテ、六時ニ再ヒ勞徳ノ宅ニ帰り、(『米欧回覧実記 第三十卷 (二)』二二五ページ、明治十一年十月・一八七八年刊。)

③夕五字ニ汽車に上り、六字に再ヒロートの宅に帰る、(『米欧回覧実記』の素稿、『久米邦武文書 (三)』一一一ページ。)

①は岩波文庫本の本文であり、②は原刊本の本文。③は明治五年に現地で記した久米のメモである。これらの対比から久米は明治五年に、ヨーロッパで、「五字」「六字」と書いたことが判明する。ところが、帰国後、自分のメモや、他の人の記録を基にして報告書をまとめて、明治十一年に出版するとき、「字」を「時」に改めた。時長の場合も同じである。

17、①此地ハ、英国ノ^{チヤンネル}岔海ニ接近シ、英国ト六時間ニテ往来ヲナスヘシ、(『米欧回覧実記 第五十卷 (二)』岩波文庫本一八五ページ)

②此地ハ、英国ノ^{チヤンネル}岔海ニ接近シ、英国ト六時間ニテ往来ヲナスヘシ、(『米欧回覧実記 第五十卷 (三)』一九五ページ。)

③此処は英岔に近く、英より此に至る六字間を費すに過す (『久米邦武文書 (三)』一九三ページ)

久米がベルギーでこれをメモしたのは一八七三年（明治六年）のことであり、太陽暦の二月十九日であるから、日本では時刻・時長を表示するのに「時」を使っていたはずであるが、久米は「字」を使い続ける。オランダで二月二十六日に、「是より三字十五分の汽車に上り、四字半に帰館す」（『久米邦武文書（三）』二〇九ページ）と書いている。時長を書くときも同じである。三月七日に「東南を走ること一字間」（『久米邦武文書（三）』二一七ページ。オランダを出発してドイツに向かうときのメモ）とある。ただし、久米が時刻や時長の表示に「時」を使用しないと言うことではない。明治五年九月にエジンバラで次のように「字」と「時」を用いて書いている。

18、宮内の廃寺を回^{（マヤ）}りて而^{（マヤ）}帰る、時^{（マヤ）}き已に三字に近し。／三時半過より再ひ出て、汽車製造所に至る、（『久米邦武文書（三）』一一七ページ。）

また、明治五年九月二十一日に新城^{ニューカッスル}で次のように書いている。

19、二十一日は晴天、朝十字過より発車し（中略）其石を砕きたるを食塩に和して、炉中にいれて之を焼くこと十二時^{||}にて、之を撥き出して傍の場^{||}に送る、（『久米邦武文書（三）』一三二ページ・一三三ページ。）

この「十二時」は二四ジ制の時長表示である。時刻表示が時長表示を兼ねることは当時ではまだ一般的であった。原刊本では「此炉ニテ十二時間熔煉ノ後ニ掻キ出スト謂ヘリ」と改訂されている（第三四巻・第二冊二六九ページ）。久米が時刻や時長の表示に「時」を用いることは、少なくともあるけれども、ある。しかし、特に時刻表記には「字」の使用が多い。

久米邦武と同じ視察団にいて、副使を勤めた元長州藩士、桂小五郎、改め木戸孝允も、二四ジ制に「字」を多用す

る。木戸の場合は慶応四年からの日記が残っているのでこの時期の日記も記す^註。

20、朝雑客至る十字家を出十二字過伏水に至る〈中略〉薄暮桜ノ宮堤下を過く

（『木戸孝允日記（二）』慶応四年四月一日）

21、朝八時過岩御旅官（館）に出る〈中略〉二字過寓に帰る〈中略〉五時に有約対州邸へ至る〈中略〉四更に寓に帰る

（『木戸孝允日記（二）』慶応四年四月十六日）

このように「時」を交え、また、「薄暮」や、「四更」のような表現もするが、「字」が圧倒的に多い。『太政官日誌』の届け書と同じである。この傾向は木戸が明治四年十一月十二日に横浜を発ち、アメリカ・ヨーロッパを視察して六年七月二十三日に横浜に到着するまで変わらない（木戸は使節団より一足先に帰国する）。

22、九字より一字まで会議夕六字前より山口肥田久米など、シヨージタウンの方へ車行す。

（『木戸孝允日記（二）』明治五年五月二十七日）

23、九字半より久米と西岡の処に至る如例二字十五分よりマルシヤールの案内にて巴里の下水道に至る〈中略〉四字

半帰寓六字より大原令之助を訪ひ〈中略〉八字半帰寓（『木戸孝允日記（二）』明治六年一月十六日）

木戸孝允は日本の太陽暦の採用を電信で知り、旧暦明治五年十二月三日を、明治六年一月正月と日記に記している。したがって、時刻制の改変も知っていたはずである。しかし、「字」を使い続ける。時長の場合も同じで、「一時間」は「一字間」である。

24、西洋一里の行程六十斤の石炭を費し二十トンの荷を運送すると云一字間或は四里或は六里を進むと云六字帰宿

〔木戸孝允日記（二）〕明治五年九月十二日。イギリスにて

ただし、「時」をまったく使用しないわけではない。

25、午後三字サイゴン府へ達すへ中略六時頃より揚陸して市街を散歩へ中略九字帰船〔木戸孝允日記（二）〕明治六年七月十日。サイゴンにて。

26、各々働き時限は一周間五十四字一日に割るときは一日九時間なり然りと雖も平常は十時間総て働きサチューデーに十二字前より休と云ガラス製造所の諸屋に至り二字前ホテルへ案内中食を認二字過より発此地へ中略于時五字過メヤーステーションへ来り迎ふ七字より戯場へ案内せり十一字過帰宿〔木戸孝允日記（二）〕明治五年九月二日。イギリスにて。

「時」よりも「字」の使用がはるかに多い。時長の場合も同じである。明治十年になっても、「十字五十五分の瀧車に而」（四月二日）のごとく「字」を使うことがある。

「何ジ」を「何字」と書く侍は多くいる。川路聖謨もその一人で、慶応三年（一八六七年）に、日記『東洋金鴻』で、時刻を一二時制と、「字」の二四ジ制を併用している。^註これに先立つ日記、『長崎日記』（嘉永六年・一八五三年一〇月から嘉永七年二月まで）では一二時制と二刻制の併用であり、『下田日記』（嘉永七年・一八五四年一〇月から安政二年四月まで）^註では一二時制を用いる。ところが、一〇年ほど経つと、一二時制に、「字」の二四ジ制を交えるようになる。

このように見てくると、慶応年間から明治の極初期にかけて二四ジ制が文字に書かれる場合、「字」が使われ、特に明治に入ってから、その傾向が強くなることが分る。それならば、ぎりぎり何時ごろにまで、時刻・時長表示の「字」の使用がさかのぼれるか。そして、「時」とどのような関係をもつか。

〔七〕

蘭学者が時刻表示・時長表示に二四ジ制を用いる場合、「時」で表記していたことは周知のとおりである。^{註11}では、蘭学と関係のない人はどうであったか。万延一年（一八六〇年）に、咸臨丸やポーハタン号でアメリカに行った侍たちの日記を見ると、時刻表示や、時長の表示はさまざまである。一二刻制で記す人あり、一二時制で書く人もいる。二四ジ制を使う人もおれば、二種類の時刻制を混用する人もあり、二四ジ制の時刻に一二時制の時刻を添えて書く人もいる。副使、村垣淡路守範正は出発の当日のことを日記に次のように書く。

27、巳時^{註12}過る頃立出るとて

玉の緒は神と君とにまかせつゝしらぬ国にも名をや残さん

軍艦操練所へ参りければ正興忠順勘定組頭森田行「岡太郎布衣」また下司の人々皆打ち揃ひ夕八時頃^{註13}小舟に乗りて炮台のあなたに出れば風つよく波高く成りて森田行ははやゑひ心の様子なり

竹芝の捕波遠くこき出てゝ世に珍しき舟出なりけり

などと言えるほとに品川沖にかゝれる米利堅の軍艦ポーハタンにつきて乗移れば〈中略〉羽根田の岬など一むらの雲のはしるかと思ふはかりに過て夕第六時「以下渠の時を用ゆ則薄暮也」横浜に碇を入たり（万延一年正月十八日）

ポーハタン号に乗り込むまでは和文調で一二刻制（「巳時」）を用いる。次に、当時一般であった一二時制（「夕八時」）の使用に移るが、品川沖でポーハタンに乗り込んで横浜に碇泊すると、「夕第六時」と言い、その下に「以下渠の時を用ゆ則薄暮也」と割り注を付けている。その後は、「第五時」、「午後二時」、「第三時」「八半時頃」、あるいは、「一時」「我半時」はかり走りて家あり休所と見へて車を止（閏三月六日）などと、時刻や時長を二四ジ制で、「時」の文字を用いて記す。^{註14}

ところが、この本文は『遣外使節日記纂輯』^{註15}に所収されている『遣米使日記』によつたのであるが、これは、当時のメモを参考にして後日、書き改めたものであるらしい。村垣範正の時々のメモと思われる『並行日記』^{註16}を見ると次のごとくである。（原文は一つ書きであるが、今は「一」を除いて示す。以下でも同じ。本稿末に掲げた写真を参照）。

28、今朝四時過供揃^ニ而出立〈中略〉八時練兵所出船八半時過品川沖西国ホーハタン^江乗組直^シ第四時二分祝砲^ニ十七発出帆
六時一分横濱^江碇泊（安政七年〓万延一年一月十八日）

「今朝四時」の「四時」は「よつどき」であり、二四ジ制の午前一〇時頃のことである。これと右に掲げた『遣米使日記』の文章と比べると次のことが判明する。村垣はメモを一二時制で書き、浄書するときに門出の時刻を一二刻

制に改めて「巳刻」としているのである。そして、軍艦上の人となつてからは二四ジ制を使い、詳しく分の位まで書き留めている。そのなかに注目すべきことがある。「第四時二分」と「六時一分」の「時」に「シ」と振り仮名を付けていることである。さらに前者には「第」を冠している。「四時」や「六時」は「よつどき」「むつどき」と読まれかねない。四から九までの数字の場合は一二時制で読まれる恐れがある。そこで、振り仮名を付けて「ジ」の音を誘導している。そのうえ、時の序列を示す「第」を付けている。こうすれば、二四ジ制であることの表示がさらに確実になる。「第」の上に「西洋」を付ければ万全である。しかし、煩わしい。村垣はそこまではしていない。村垣は、「時」に「ジ」の振り仮名を付け、また、序列を表す「第」を付けて二四ジ制であることを明示している。それほどまでに時刻を表す「時」は誤読をさけるための工夫が必要であつた。備忘録であるから当然の行為であつた。村垣が「時」に「シ」の振り仮名を付けるのはこの箇所だけではない（本稿末に掲載の写真を参照）。

29、今朝五時半過巴納麻港^江着船（万延一年閏三月五日）

30、薄暮第七時半^シニヨロク港口 サンテフツク^江碇泊（同 閏三月二十日）

端的に「ジ」と書くことさえある。本日記で片仮名を助詞・助動詞・外来語以外に使うのは特例である。

31、「午後二^シジ^シの測量絵図仕立局」（同 四月十二日）

浄書本ではこの箇所は「四月十二日曇午後二時より例の案内にて七八町も行けるか測量地図を仕立る局なり」である。村垣が時刻表示に誤解がないよう工夫を凝らしてメモをとっているのは次のような書き方にも現れている。

32、今朝五半時^{第八時}華盛頓旅宿出立（同 四月二十日）

33、今朝四時^{十時前也}ホルチモール出立夕七半時^{五時過也}フルトルヒヤ^五宿泊（同 四月二十一日）

34、第十時^三馬車^三而蒸氣車小屋^三至ル（同 四月二十一日）

資料32では「五半時」の下に「第八時」と細字を添える。先ず一二時制を書き、それに対して二四ジ制で、そのことが明瞭になるように「第」を冠して「第八時」と記している。この箇所を浄書本『遣米使日記』で見ると、一二時制と二四ジ制を逆にし、「朝第八時五半時也」と書き直している。この場合は一二時制の時刻が「五半時」であるから現実には誤読はないが、資料33の場合は細字の注がなければ誤解される可能性は充分にある。「四時」が「よつどき」であることを明示するために、すなわち「ヨジ」ではないことを確実に示すために「十時前」が必要であった。「十時」という時刻は一二時制にないからこの注は正確に「四時」の読み方を導く^註。資料34の「第十時」に一二刻制の添え書きがないのは「第」があり、「十」の数字であれば、一二刻制の時刻ではあり得ないからであろう。村垣は、彼私の時刻を対照させるだけではなく、時刻にできるだけ誤解が生じないように細かく心遣いをしている。村垣が浄書本で「夕第六時」のあとに「以下渠の時を用ゆ則薄暮也」と割り注をしているのも、「時」が「どき」と読まれない別の工夫の一つであった。

村垣が一月十八日に名前を挙げている森田岡太郎清行は日記『並行日記』を一二時制と二四ジ制の両方で書くので「時」の文字が判読しにくいのが、確実に二四ジ制であることを示すときには次のように記す。

35、彼国ノ者朝ハ時計ノ八時、昼ハ三時ノ食、夕七時八時ノ間ナリ」（万延一年閏三月十三日）

「時計ノ」という限定は二四ジ制の時刻以外を表さない。

村垣の言う「渠の時を用ゆ」の言い方に似た表現に「彼（ノ）」がある。

36、舟歩頗ル速ニシテ、彼一時「我半時」ニシテ十一里余駛ル。未後愈順風、舟歩矢ノ如シ（玉虫左大夫『航米日録 第六卷』。万延一年八月十二日^{註18}）

この場合は時長表示であるけれども、「彼（ノ）」を被せて、「我（ガ）」の一二時制との混同を避けようとしている。これらは二四ジ制を確実に表示する手段であるが、二四ジ制のなかにあっては、一二時制の場合も同様に工夫が必要であった。万延一年にポーハタン号に乗ってアメリカに行った肥前藩士の木村鉄太は『航米記^{註19}』で次のごとくに時刻を記している（本稿最後に掲載の写真を参照）。

37、夕七^ツ時過テ。一夷人ニ逢フテ。其家ニ抵ル。（安政七年＝万延一年二月十六日）

38、東風冷ナリ。辰巳ニ向フ。昼八時。蒸氣機関損ス。是ヲ以テ。船ヲ停ルコト。凡我一時。七時。船子百十六

人。歩操ヲ驗ム。（同 閏三月一日）

39、明日船ヲ発シ。華盛頓^{ワシントン}ニ向ント欲ス。故ニ今日四時。先ツ船ヲ。「ポルトベロ」ニ向ケ。溪水ヲ取ル。（同

閏三月七日）

資料37の「七ツ時」は「ツ」があるから一二時制による時刻であることは明らかである。しかし、資料38の「八時」と、資料39の「四時」には「ツ」がない。振り仮名もない。しかし、「八時」が「やつどき」であり、「四時」が「よつどき」であることは間違いない。実は、資料37の「七ツ時」も、「ツ」がなくても、「ななつどき」であることは明白である。なぜならば、訓読符が付いているからである。一二時制であることが、漢数字と「時」の間に置かれた、

左寄りの縦線、すなわち訓読符によって指示されているのである。連続する二字の漢字を訓読するか、訓を交えて読む時は訓読符を付けることがある。その方法をここで使っている。字音を使う二四ジ制でないことを訓読符で示している。この符号は当時の漢学における約束事である。字音で読む場合（外来語の表示にも）は、ほぼ中央に縦線が引かれる。『航米記』では「湾中洲砂多ク。船路ハ只東西二ノミ。今時商船大小十隻泊セリ。横浜ヲ出テヨリ。風雨多ク。」（万延一年二月十四日）や「西班牙」（閏三月五日）のごとくであり、たとえば、「大隊都テ十余。小隊毎ニ二行ニ横列シ」（四月二十八日）は「小隊ごとに二行に横列し」と読ませるために訓読符と音読符が活用されている（しかし、筆写本では、左寄りに付けるべき訓読符が中央に来ることがままある。資料38「我一時」の「一時」が「いっとき」で時長表示であることは「我（が）」があるから明らかであるが、訓読符は中央である）。当時は、二四ジ制であることを明示する方法が利用されるほかに、このように確実に一二時制であることを示す方策も施されることがあった。ポーハタン号・咸臨丸や、アメリカでの生活であり、時刻情報は二四ジ制であるから、これと持ち前の十二時制とが衝突しうる環境にあったからである。

このように、ポーハタン号や咸臨丸での二四ジ制の秩序内での暮らし、そしてアメリカに到着してからの二四ジ制という《時》の序列内での生活においては、二四ジ制であることを示す工夫、あるいは逆に一二時制であることを明示する手段によって二四ジ制による時刻表示でないことを示す方法を用いて、両者の混同を避ける必要があった。一二時制と二四ジ制という二つの異なる制度の、そして、同じ「時」の文字を用いる制度の接触によって生じる異常事態を切り抜けなければならなかった。しかし、二四ジ制の「ジ」に「字」を当てることは、万延一年の遣米日記には

まだ見られない。

万延二年二月が文久一年になり、文久四年二月が元治一年、元治二年四月が慶応一年と、幕末の最終期は年号が目まぐるしく変わるのであるが、文久年間から元治年間では二四ジ制に「時」が使われている例を見つけることは容易である。

40、今又其葬式に就て下文を記す去年十二月二十九日午前十一時半に主家の送柩の行列調ひたり（『官板』海外新聞』卷五、文久一年十二月刊^{註10}）。

41、第三抜隊龍の士官横浜居留地より半時間遊歩をなせる間に或る暴人のために殺害せられし不幸の事件を過日の報告にて只其大略を記載せし故に〈中略〉当日の夕方に至りて次日午後四時に葬送をなす可き旨を布告せり（『日本貿易新聞』第二四号、文久三年九月刊^{註11}）

42、ウフレメントの下なるフヒシルと云砲台を攻て奪取れり我戦争の有様は午後三時「日本八ツ半に当る」軍艦よりボムを烈しく放ち掛け夜未だ十時「日本四ツ時」に至らざるにうばる取れり（『海外新聞』第一号、元治二年刊^{註12}）慶応年間でも、新聞では二四ジ制が使われる場合はジに「時」が当てられることがある。

43、当日到着の書翰を其夜十時「四ツ時頃」に配分す可き旨夫々へ触れ置きしに其刻限より一時も早く飛脚役所へ人々寄集り（『日本新聞』第二一号、慶応一年九月、横浜開版^{註13}）

44、兵庫に於ては第七時十五分の潮汐最高く満つ〈中略〉旅館の辺にては潮汐八時十七分なり〈中略〉低汐には二十四時間毎に干満僅に一回なり（『中外新聞紙』卷九、慶応三年十月^{註14}）。

45、右のサラミス船は昨日夕方第六時再び兵庫を向け出帆せり（『江湖新聞』六号。慶応四年閏四月十二日^注）

46、李^{フ。イ。セン}漏生オルカーン「船名」に松山藩家族国元え引揚のよし今三日十二時品海出帆いたし候（『内外新報』二九号。

慶応四年五月三日^注）

右の文久年間と元治二年での「時」の文字は、洋学の心得のある人びとの手になる表記と見てよいであろう。慶応四年の二例は汽船と関係があるための使用であるかもしれない。いずれにしても、二四ジ制が使用される場合、「時」の使用が継続する。

要するに、万延年間・文久年間・元治年間頃においては、二四ジ制の時刻表示に「時」が使われるのが普通である。ところが、慶応四年になると、既に見たように「字」を用いる『太政官日誌』が現れる。その一年前の慶応三年には川路聖謨が「字」を用いて二四ジ制を使っている。そうすると、二四ジ制の表示に「字」を使用し始める時期が狭まってくる。

〔八〕

文久二年の幕府の記録『触留』に、「西洋第一時」「西洋第九時」に混じって、次のような時刻表示がある。

47、明八日対馬守殿御宅^注 仏国ミニストル西洋第八字時参上いたし候旨昨六日及御達候処西洋第一字時御宅^注 参上い

たし候旨申立候間此段御達およひ候。（『触留^注』四月七日）

このほか、同年二月十八日に「西洋第二字時」がある。さらに、「字時」は次の文献にも見える。

48、第七字時半前、別杯を酌み、銘々へ辞して出立。第十字時半過、品駈脇本陣着。(柴田剛中『仏英行』^註、慶応一年閏五月三日)

49、第九字時に至り、スクループの響轟々、忽ち港口を出る矢の如し。(『仏英行』、同 閏五月五日)

50、夕第六字時六ミニュート過抜錨、港口を戻りて海路に就く。(『仏英行』、同 六月二日)

「第〇字時」が二四ジ制の表示であることは言うまでもない。「時」に振り仮名を付けたり、「時」を片仮名で書いたり、あるいは「〇時」の上に「第」を付けたり、「彼(ノ)」を置いたりする方法とは別の、二四ジ制の時刻表記法がここに案出された。しかし、『仏英行』で圧倒的に多く使われるのは「字」のない「第〇時」である。「第〇字時」が簡潔さに欠けるのと、「時」の使用の伝統からであろう。だが、「字時」は明治に入っても使用される。

51、分配既ニ定リ明朝ヨリ各進攻セントス夜二字時頃長岡ノ賊四百許人大黒浦瀬ノ間ヨリ田禾沼葦ノ間ヲ匍匐シ潜ニ城外ニ入り(明治二年『太政官日誌』三号、長門藩届書)

52、我三番小隊半ヲ分テ之ヲ援ヒ半ヲ以テ川手ノ賊ト戦フ死傷二人十字時ヨリ六字時ニ至リ賊退ク(中略)二十二日北陸道 官軍攻城ノ一面西南ノ手ヲ引受我奇兵隊(中略)官軍ハ田島ノ残賊ニ当ル八字時城中降旗ヲ豎テ肥後父子大手門外ニ出テ(明治二年『太政官日誌』四号、長門藩届書)

両文書とも通常は一二刻制と一二時制が併用され、前者は「申時・巳牌・申牌・申牌・辰牌・七ツ時」、後者は「辰牌・巳牌・午牌・巳牌・午牌・辰牌・未牌・巳牌・午牌・未牌・申牌・酉牌・未牌」の後にそれぞれ「字

「時」が使用されている。振り仮名の「ナ、ツドキ」や「イ、ツドキ」を漢字で書くと二四時制との混乱が予想され、二四時制で表記すると一二時制と間違えられる危険性があり、また、一二刻制で記すと読みにくく理解しづらい、といった状況の中で、一二刻制の漢字表記に一二時制の振り仮名を付けるという方法と、「字時」で表示する方法が採用されている。このように種々に工夫されるなかで、「時」を付けない「字」だけの表記も案出された。そして、一二時制を常用する層へ二四ジ制が広まるなかにおいて、書記言語では「時」と「時」の衝突は必至であるから、それを回避する方法として、「字」が使われ始めた。

53、明十四日西洋第十二字御軍艦操練所（マツ）おゐて御衆中方亜蘭両公使ニ御対話（『触留』文久三年九月十二日）

54、第十字上海に着（『岡田小記』、慶応四年閏五月十日）

前者は徳川幕府の公的文書に使用されている例であり（本稿末に掲載の写真を参照）、後者は、「字」の使用が伝播して行く過程での初期の使用である。したがって、後者では「何字は時の名なり、西洋一般、一昼夜を二十四時間に分つ、今我時と混ぜんことを恐る、故に言相通するを以て、記中仮に字の字を用ゆ」という自注が必要であった。蒸気船の中では時計による欧米式の生活があったから、上海に到着した時刻を『岡田小記』の筆者は二四ジ制で書こうとしたのであろう。^{（註）}ところが、「時」の文字を使ったのでは「どき」とも読まれるから、その「混ぜんことを恐」れ、「字」を用いたと言うのである。新しい《時》を表す方法に対する自分なりの解釈と納得である。

「字」の使用を誰が創始し、いかに伝播したかは、ある程度のことしか分からない。幕府の関係者が考え出し、それが、欧米人や、その文物との接触により、また、汽船の中での生活によって、さらに西洋式の軍事教練の中で、必

要に應じて、次第に広まったのであろうが、詳細は不明である。文久三年や慶応一年の使用例、慶応三年の川路聖謨の使用、慶応四年以後では『太政官日誌』や木戸孝允の日記に見られるように相当に広く使用されている。しかし、それはほぼ明治五年頃までの短期間であり、その使用の状況は「時」の文字と係わりながら一様ではなく、層があった。これが今まで述べてきたことの結論である。

「字」と「時」の関係は、二四ジ制の表記に「字」が使用される中で「時」の使用が始まったのではない。その逆である。明治五年の『太政官日誌』に掲載された二四ジ制導入の予告文を読むと、明治六年から二四ジ制の「ジ」に「時」が当てられるようになったと受け取られかねないけれども、そうではない。日本における二四ジ制の歴史から言えば、僅かな期間、「字」が使われることがあったに過ぎない。明治五年当時は、不定時法を禁止し、「字」の文字の使用を抑制さえすれば、自然と「時」を使う二四ジ制が残る状況になっていた。「今後改テ」、定時法を始める必要はなかった。それほどに二四ジ制が受け入れられ、「時」の表記に、これは勿論、教養ある識字層にとってのことであるが、馴染みがあった。「今後改テ」、明治六年一月一日から二四ジ制を使うという『太政官日誌』の法令は実情に合わない面がある。「是迄」も二四ジ制は使用されていた。また、「今後」、「時」を用いて「何時」と書くことにするという条文も事実と一部、合致しない。この法令は二四時制の施行の全国的な徹底を図ったにすぎない。

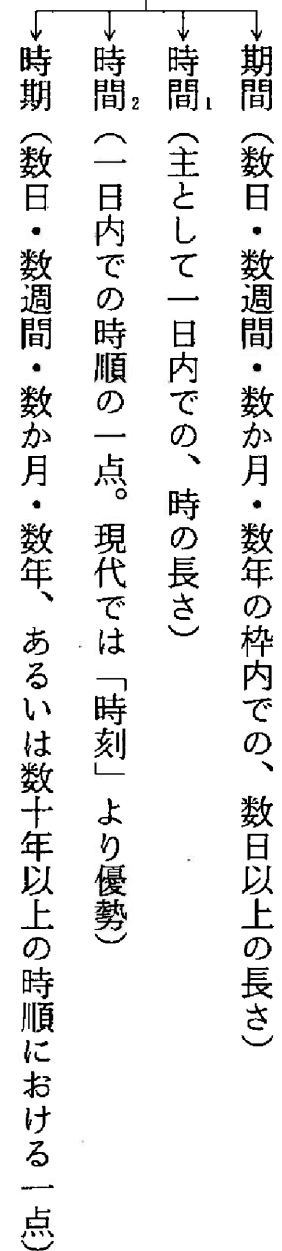
《時》をめぐる表記の問題はほぼ一〇年の短期間で終了した。ではなぜ、このような些細な用字法にこだわるのかと言えば、もし、明治六年一月一日から二四時制が始まったとすれば、《時》をめぐる漢語群の出現との整合性がなくなるからである。

〔九〕

現在、時刻表示として使う「二時」「三時」は古くは時長をも表した。そこで、両者の混同を避けるために、時長は「二時の間」「三時の間」という言い方を経て、「二時間」「三時間」という言い方が生まれた。また、分単位や、秒単位にも、「二分時間」「三分時間」「二秒時間」「三秒時間」という言い方がなされた。それらの中で、「時間」という単語が分離した。こういう推論が成立するならば、「時間」は最初は単に「時の長さ」を意味する単語であったはずである。事実、そのような意味の「時間」が江戸時代末期から明治中期にかけて多数、見られる。^{註31}

この長さに限定のない「時間」が幕末から使用されていたからこそ時の流れの一点をも表す用法が早くも明治初期に出現した。明治初期の「時間」は多義語であり、「時期」や「時刻」の意味にも使用された。しかし、やがて通常は、一日の枠の中での一定の長さを表すようになる。その後釜語、補完語として「期間」が造語される。一方、一日以上の、多くの場合は数週間・数ヶ月以上の枠の中での一点を表示する「時間」の代用語として「時期」が作られた。「時間」を中心に《時》がこのように分割され、これに対応する単語が誕生したと推定されるのであるが、この《時》をめぐる漢語群の造出は、「二ジ」「三ジ」を「二字」「三字」と表記したのが文久年間頃から明治五年までくらいの短期間に限られ、「二時」「三時」などの表示は、蘭学の中で成立して以来、途絶えることなく使用されていたという二重構造で捉えなければ、説明が不可能なのである。

時間（時の長さの限定なし）



幕末・明治初期におけるこれらの語の長さの枠、《時》認識の範囲を確定することは、容易でなく、さらなる考究の余地があるけれども、概略このような意味の分化を想定することが可能であるとすれば、繰り返し引用した、二四ジ制の導入布告の内容はおおむね現実の追認であったということになる。

『太政官日誌』のなかで、二四ジ制の表示に「時」の文字が所々に見えるのは、「時」の文字の使用が徐々に生まれ、増えて現代的になって行く様を示すのではない。もともと「時」の文字の使用されていたのが、「時」を使用したのでは誤解される危険性のある環境が生まれたために一時期、「字」が使用されることが多くなり、そのなかで、以前の「時」が、「時」を使用することの抑制力のゆるんだときに、たまに顔を出すことがあったと解釈すべきである。軍艦・蒸気船内での「時」の文字の多用は、欧米の《時》の秩序が維持しやすい環境にあったから可能であったのであり、陸上の民間のように一二時制との接触による混乱、その影響を予想する必要が少なかったからであると解すべきであろう（蘭学者など、洋学関係者の間で「時」の文字の使用が継続したことについても同じことが言える。）。久米邦武や木戸孝允が欧米で、「字」に混じって「時」を使用することがあるのも、「時」の先取りではなく、環境に

即した当世風の書き方の合間に従前の表記が姿を現したに過ぎない。

当時は、識字層と非識字層など、教養や階層の違いによって使用される時刻制が違っていた。また、識字層が二四ジ制を採用したとしても、表記に「時」を使い続ける人、新方式の「字」を常用する人、さらには両用の人など、さまざまであった。この現実を踏まえて、明治五年の時刻に関する布告は発せられた。条文の内部に矛盾を含むのは止むを得ないことであった。

〔附記〕 本稿は、平成十七年十二月三日に、昭和女子大学において開催された近代語学会での発表を基に、さらに、その周辺の資料を整理し、まとめたものである。

【注】

- 1 『日本鉄道史上』、日本鉄道省編。昭和四十九年九月、清水堂復刊。
- 2 石井良助編。昭和五十五年三月、東京堂出版復刻による。以下での引用はこの復刻版による。
- 3 拙稿「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」（『或問』第九号。近代東西言語文化接触研究会編。二〇〇五年五月刊）。
- 4 鈴木淳『新技術の社会誌』（日本の近代）15。平成十一年・一九九九年十二月、中央公論新社刊。
- 5 鈴木英夫「仮名垣魯文の語彙」（佐藤喜代治編「講座日本語の語彙」6）『近代の語彙』所収。昭和五十七年二月、明治書院

刊)。

- 6 平成十三年四月・二〇〇一年四月、吉川弘文館刊。
- 7 昭和五十年九月、宗高書房復刻。
- 8 『木戸孝允日記』(日本史籍協会叢書74・75・76、昭和六十年七月・八月覆刻再刊)による。
- 9 前掲「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」。
- 10 『長崎日記』『下田日記』は「東洋文庫124」(昭和五十一年五月、平凡社刊)による。
- 11 前掲「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」。
- 12 一二時制の「四ツ時」、一二四時制の「午前一〇時」に当たる。
- 13 二四時制の「午後二時」に当たる。
- 14 前掲「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」。
- 15 日本史籍協会叢書96。昭和四十六十一月、東京大学出版会覆刻。
- 16 慶應義塾図書館蔵。表紙の右端に「安政七年庚申正月十八日より至四月」とあり、中央には「亜行日記」、左端下に「村垣」とある。自筆か否かは不明。
- 17 浄書本ではこの箇所は「朝第十時」に改められている。
- 18 『西洋見聞集』(「日本思想大系」所収。一九七四年一二月、岩波書店刊)所収。なお、「我が」「我国」は、「飲食ハ毎日三餐ナリ。早餐ハ〈中略〉七時」「我国六ツ時」ヨリ十時ノ間各其便ニ從テ食ス」(五月十二日)のごとく日本風であることを示すのによく使われる。これは《時》に限らない。
- 19 「肥後国史料叢書 第二巻」(昭和四十九年九月、青潮社刊)所収。
- 20 『日本初期新聞全集1』(昭和六十一年六月、ぺりかん社刊)。

- 21 『日本初期新聞全集³』(昭和六十一年十二月、ペリかん社刊)。
- 22 『日本初期新聞全集⁵』(昭和六十二年四月、ペリかん社刊)。
- 23 『日本初期新聞全集⁵』(昭和六十二年四月、ペリかん社刊)。
- 24 『日本初期新聞全集¹²』(昭和六十三年六月、ペリかん社刊)。
- 25 『日本初期新聞全集¹⁴』(昭和六十三年十月、ペリかん社刊)。
- 26 『日本初期新聞全集¹⁵』(昭和六十三年十二月、ペリかん社刊)。
- 27 国立国会図書館蔵。資料47は、『古事類苑』や、橋本万平『日本の時刻制度』(昭和四十一年九月、塙書房刊)で紹介されている。『触留』での通常の時刻表示は一二時制であるが、外国人が関係するときには二四ジ制の種々の表記がなされる。
- 28 前掲『西洋見聞集』。
- 29 石井研堂『増訂明治事物起原⁷』(ちくま文庫。一九九七年十一月刊)による。
- 30 高杉晋作も長州にいるときは一二時制で時刻を日記に書いているが、文久二年(一八六二年)四月二十九日、千歳丸で長崎を出航すると、すぐに二四時制で時刻を書く。拙稿「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」を参照されたい。
- 31 前掲「近代日本語における「時」の獲得―新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる―」。

